大道芸 通信

編集発行/日本大道芸・大道芸の会 光田 憲雄　(daidogei@kib.biglobe.ne.jp) http:// daidogei.info

日本の生業⑤
相撲の始まりは女相撲から



土俵上で挨拶していた人が突然倒れたため、複数女性が救助に向かったら、「女は土俵に上がるな」と館内放送があったと。それでも人命が大事と、心臓マッサージを始めた看護士に、繰返し「土俵から降りろ」の放送が続いたという。何でもそれが伝統だとか。

（平成三十年＝二〇一八年　四月四日　京都府舞鶴市長適切な処置の結果一命を取り留める＝翌日新聞記事による）

新聞も対応が素早かったからと褒めている。もし放送に従い途中で投げ出し土俵を降りていたら間違いなく手遅れになっていただろう。そうなったとき相撲協会の連中は、責任とることができたか？　間違いなく「否」である。

権威を笠に着て吠える連中で責任をとった話は聞いたことがない。いつも自分より肩書きが低いものや弱いものに押しつけて　こそこそにげまわっているやつばかりである。

何より「そんな伝統何時から出来た？」

「人の命と伝統、どっちが大事？」と聞いて、明確に答えたやつなど一人もいない。せいぜい「昔から」と言うばかりで、考えようともしない。

「その程度でしかないなら、伝統とやらを変えりゃ済むことじゃないか」等、普段相撲なんか見ない私でさえ思った。苟も利権集団　日本相撲協会は公益財団法人として、様々な優遇措置を受けている。その原資は女性も含む皆からの税金である。また女性が怒らんのも不思議である。

「女性は土俵に　上がっちゃいけん」と云う伝統が何時から出来たか。誰もはっきりしたことを知らんし、言わん。検証してみる。

そもそも相撲の始まりは、『日本書紀』雄略天皇十三年九月(五世紀末？)が記す左記の話である。曰く。

秋九月(中略)乃喚集采女使脱衣裙而著犢鼻露所相撲　（『日本書記』）

（意訳）秋の九月、采女を集めて衣装を脱がせて褌をさせ、相撲を取らせた。采女とは、天皇や皇后の身の回りの世話をする女官のことである。

「裙」＝肌着
「犢(とく・こうし＝子牛)」
「犢鼻」＝褌

雄略天皇は、『宋書』「倭国伝」が載す「倭の五王(讃・珍・済・興・武)」のうち「武」に比定される五世紀実在の人物である。

これに対し、「公益利権集団日本相撲協会」は　垂仁天皇七年(紀元前二十三年)の時代に戦った　野見宿禰と当麻蹶速の神話（当麻蹶速と戦わせるために、出雲から呼ばれた)を強引に取り込み、相撲の元祖としている。

野見宿禰自出雲至。則当麻蹶速与野見宿禰令□る。
（手辺に角)力。二人相対立。各畢足相蹴。即折蹴当麻蹶速之脇骨。亦踏折其腰而殺之。故奪當麻蹶速之地。（『日本書紀』）

男相撲より先に始まった女相撲のその後については、途中経過を省略し、江戸時代の女相撲興行まで一挙に飛ばす。井原西鶴の『好色一代男』（天和二年＝1682刊)が載

出雲から呼ばれた野見宿禰は、当時のチャンピオン當麻蹶速との闘いに際し、當麻蹶速の脇骨を蹴り折ったうえ腰を踏み折って殺した挙げ句、蹶速の領地を奪った。これが「捨芳(じりき・すまい)」である。

相撲というより殺しあいの喧嘩か　闘争である。恰も古代ローマで、奴隷同士、或いは奴隷とライオンを戦わせて勝った方が賞賛されたことと同じ。今の相撲とは全く別物である。

同じとする発音も、「すもう」と「すまい」では明らかに違う。無理にこじつけずとも、女相撲なら最初から相撲である。

漢字も読みもこじつけ、挙げ句神話まで持ち出さずとも、神事としての相撲なら奈良時代まで待てば、宮中行事として「相撲節会」が行われるようになる。勿論殺し合いとは無縁である。現在も各地に伝わる、神事としての相撲の元祖だろうとは思うが、今回のテーマと離れるので、これ以上の詮索や言及は避ける。